

「春の山小屋にて (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

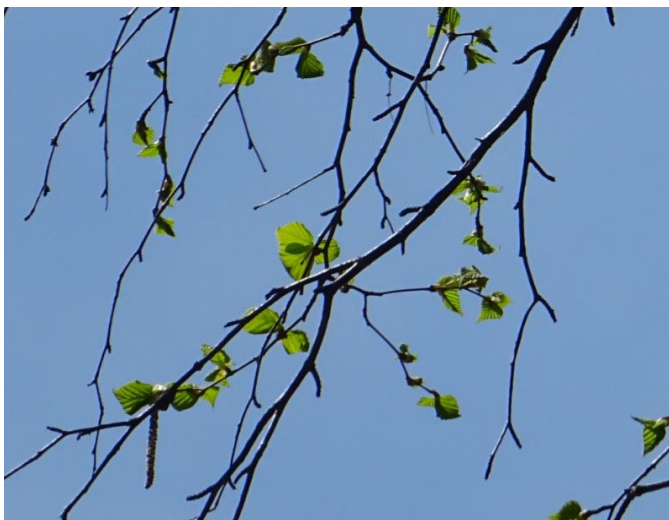
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

少し前まで、完全に「冬枯れ」の風景だった来た軽井沢。東京はすでに初夏(日によってはほとんど夏)の陽気になっているが、北軽井沢はやっと新緑の季節を迎えた。



このあたりに多い樹木は、カラマツとシラカバ(正確には「シラカンバ」)である。私の山小屋の庭にも、この二種類が圧倒的に多い。今はどちらも新しく葉を出し、それらが重なって見ると、実に美しい。不思議なことにカラマツには、秋についた果実が、そのまま枝に残っている。小さな松ぼっくりのような形状で「球果」と呼ばれる。球果の鱗片の隙間には種子があるのだが、それはもうほとんどなくなっている。



シラカバの葉はまだ小さい。厚みもなく、太陽光を透過して、リーフ・グリーンに輝いて見える。



この時期、シラカバには花が咲く。カバノキ科に属するシラカバは、枝から垂れた、独特の花をつける。普通は高い枝につくのだが、時々目の高さにも咲いている。知らない人は、チョウカガの幼虫が枝からぶら下がっているように見えるだろう。



(2 ページ目に拡大画像)

枝を折ってよく観察してみた。もちろんこれが一輪の花ではなく、小さな花が集まったものだ。雄花と雌花があり、雄花のほうが長く垂れ下がる。写真は雄花のようだ。匂いをかいても、良い香りはない。白樺は風媒花なのだ。スギ花粉、ヒノキ花粉は、花粉症のアレルギー物質として有名だが、実はシラカバの花粉も、かなり厄介な花粉症の原因になる。私はスギやヒノキは大丈夫なのだが、この季節に高原に行くと、決まって目や口の中がかゆくなる。長らく原因がわからなかったのだが、どうやら犯人はシラカバのようだ。

